

「その名はヨハネ」

ルカの福音書 1:57~80

はじめに

私は子どもの頃、家で犬を一匹飼っていたのですが、それが引き取られて来た最初の日のことを今でもよく覚えています。家族はみな大喜びでその子犬を迎えました。しかしその喜びはすぐに悩みへと変わってしまいました。何という名前にするかということで家族中が大いにもめたからです。結局、「マル」という親犬の名にちなんで「マルコ」という安易な命名がなされ、聖書にもある名前だから（当時はどういう人物の名前かはよくわからなかったけれど^^）ということで合意しました。これは何事においても言えることなのですが、人は話し合いによって何かを決める時、既存のもの、よく知られているもの、古いものにちなんで、依存した答えや結論を出したがる傾向にあります。特にこの名づけということについてはそれが顕著です。たとえば…父「まさひで」の息子「ひでのり」というような感じです（笑）。今日の箇所はそんな名づけに関する出来事が記されているのですが、親にちなむというか親と全く同じ名前をつけられそうになり、しかし結局は逆にそれに全くちなまない、親族の中にさえ存在しない、全く関連性のない名をつけられた一人の幼子、男の子についての話です。それでは今日も神のご計画の視点から、これを読み解いてまいりましょう。

1. 割礼

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:57 さて、月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

1:58 近所の人たちや親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださったことを聞いて、彼女とともに喜んだ。

1:59 八日目になり、人々は幼子に割礼を施すためにやって来た。

御使いガブリエルが告げたとおり、エリサベツは男の子を産みました。そしてその子に「割礼を施す」ことが記されています。これは一般的には男性の生殖器の先端の皮を切り取る、という私たちの目には実に奇妙でまた痛々しいものです。成人男性がこれを受けた場合、しばらくはその傷の痛みで性行為はもちろんのこと日常生活全般に支障をきたします。創世記 34 章にはその痛みの最中に敵の襲撃に会い、まともに戦うことができずに殺され、滅ぼされてしまったというような記事があります。もちろんしばらくすれば傷は癒え、またもとに戻るのですが、一時的とはいえ、子孫を増やすことも、滅びを免れることもできなくなる、それがこの「割礼」がもたらす状態です。それではこれが聖書で最初に行われた箇所を見ましょう。

創世記【新改訳 2017】

17:1 さて、アブラムが九十九歳のとき、【主】はアブラムに現れ、こう言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。

17:2 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。」

17:3 アブラムはひれ伏した。神は彼にこう告げられた。

17:4 「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。

17:5 あなたの名は、もはや、アブラムとは呼ばれない。あなたの名はアブラムとなる。わたしがあなたを多くの国民の父とするからである。

17:6 わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう。

17:8 わたしは、あなたの寄留の地、カナンの全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

17:12 あなたがたの中の男子はみな、代々にわたり、生まれて八日目に割礼を受けなければならない。家で生まれたしもべも、異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者もそうである。

このように「割礼」とは、アブラハムの子孫すなわちイスラエルの民を「大いに増やす」「多くの国民」「子孫に富ませ」「いくつもの国民」とし、また彼らに「カナンの全土を…永遠の所有として与え」、そして神が永遠に「彼らの神」となられる、という契約、約束、神のご計画を指し示すものです。しかしその成就、実現、達成、完成のためには、まず痛み、倒れ、滅びを経験するというのが「割礼」の行為とそれによって生じる状況、状態が表す意味です。それは聖書に記された、イスラエルの民がその不信のゆえに神の怒りにふれ、断ち切られ、殺され、その土地を奪われ、生き残った者も追い散らされるという、彼らの歴史、歩みそのものです。そしてさらにやがて終わりの日には、大患難と呼ばれる、これまで以上の痛み、苦難が彼らを襲います。しかし決してそれで終わりではないということを上記の御言葉は強調しているのです。すなわちその大患難を経た後に、その痛みを通るならば、アブラハムとその子孫に約束されたこれら祝福の御言葉が成就される、ということです。ヘブル語でこの「割礼」のことをムール(מול)というのですが、この言葉には実はもう一つ全く別の意味があるのです。それは「神の御前に(行く、持っていく)」という意味です(出 18:19)。神に逆らい、神に切り捨てられ、痛みを味わい、しかしやがて再びその「御前へと運ばれる」すなわち神に立ち返らされ、ついには永遠の祝福に与る、それがこのムールという言葉に込められたイスラエルに対する神のご計画です。

またそれは「生まれて八日目」に受けることが示されていますが、ヘブル語の「八、第八番目」という意味のシェモーネ(הַחֲמִישִׁי)は、シャーマーン(שַׁמָּן)「(土地の)豊かさ、肥沃」(創世記 27:28)という意味の言葉と結びついており、神のイスラエルに対するこれらのご計画が、彼らの所有する土地において、すなわちこの地上においてイスラエルの民への祝福が現わされるということが示されているのです。

創世記【新改訳 2017】

27:27 ヤコブは近づいて、彼に口づけした。イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。「ああ、わが子の香り。【主】が祝福された野の香りのようだ。

27:28 神がおまえに天の露と肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるよう。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

ヤコブすなわちイスラエルを「呪う者がのろわれ」「祝福する者が祝福される」世界、その成就、実現を指し示すのがこの「生まれて八日目」に施される「割礼」です。つまりこれらの神のご計画はイスラエルだけに対するものではありません。「異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者もそうである」とあったように、「諸国の民」すなわち私たち異邦人に対する神のご計画でもあるのです。

2. ヨハネ

ルカの福音書【新改訳 2017】

…彼らは幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、
 1:60 母親は「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。
 1:61 彼らは彼女に「あなたの親族には、そのような名の人は一人もいません」と言った。
 1:62 そして、幼子にどのような名をつけるつもりか、身振りで見せ、父親に尋ねた。
 1:63 すると彼は書き板を持って来させて、「その子の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。

エリサベツとザカリヤは御使いに命じられたとおり（ルカ 1:13）幼子を「ヨハネ」と名づけました。しかしそれは彼らの「親族」の中にはない、彼らの血に連なっていない者の名前でした。しかし幼子は確かにザカリヤとエリサベツの子です。これはつまりアブラハムの「家で生まれたしもべ…異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者」すなわちイスラエルの家につながった異邦人、すなわちイスラエルを祝福することによって祝福される異邦人の存在を指し示した名であるということです。この「ヨハネ」(יִיְהוָה)という名は「恵む、あわれむ」という意味のハーナン(יָנַן)からできた名で、その最初の言及は創世記 33:5 です。

創世記【新改訳 2017】

33:3 ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。
 33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。
 33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。
 33:6 すると、女奴隷とその子どもたちが進み出て、ひれ伏した。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが故郷であるカナン(の)地に、兄のエサウのもとに帰って来た時のものです。彼は自分が引き連れて来た「女たちや子どもたち」を「神が…恵んでくださった子どもたちです」と言って紹介し、ここに聖書で最初のハーナンがあります。そしてまず初めに彼の「女奴隷とその子どもたちが進み出て、ひれ伏した」とあり、この事実からもハーナンがイスラエルにつながった異邦人の存在を表していることがわかります。

さらに、ザカリヤは次の節で「舌が解かれ」たとあり、再びものが言えるようになるのですが、ヘブル語でこの「舌」のことをラーション(לָשׁוֹן)といい、本来は「国々、民族の言語(創世記 10:5)」を意味する言葉で、そして新約聖書ではなんと「異言」とも訳される言葉です。イエシュアの復活と昇天の後、ペンテコステとも呼ばれる五旬節の日に聖霊が降り、ユダヤ人であるイエシュアの弟子たちがこれに満たされて「異言」ラーションをもって、「他国のいろいろなことばで話し始めた」という出来事が使徒の

働き 2 章に記されています。それは「地の果てにまで…わたしの証人となる（使徒 1:8）」こと、また「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。（マルコ 16:15）」と言われたイエシュアの御言葉を指し示すしるしであり、全世界に、すなわち異邦人にまで福音が宣べ伝えられるということの意味しています。このようにザカリヤの「舌が解かれ」た出来事にもやはりイスラエルにつながる、イスラエルの神につながる異邦人の存在が指し示されているのです。

ちなみに私もこの「異言」の賜物を与えられていますが、残念ながらこれがどこの国の言語なのかはまだわかりません。いつかそれを知りたいと願っています。

3. 恐れ

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:64 すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

1:65 近所に住む人たちはみな恐れを抱いた。そして、これらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体に語り伝えられていった。

1:66 聞いた人たちはみな、これらのことを心にとどめ、「いったいこの子は何になるのでしょうか」と言った。主の御手がその子とともにあったからである。

神の御言葉を信じなかったザカリヤ（ルカ 1:20）の、その口が突然開いて「神をほめたたえた」パーラフ(פָּרַח)「祝福した」とあります。そしてその一部始終を見聞きした人々はみな「恐れを抱いた」と。人々の抱いたこの恐れは、実は尋常なものではありませんでした。なぜならここに使われているエーマー(הַיָּמָה)は本来、「大いなる暗闇の恐怖（創世記 15:12）」と訳されている言葉で「恐れを抱いた」という訳では意味が軽すぎます。人々は大いなる暗闇の恐怖のそのどん底に叩き落された、という表現の方がより正確です。たった一人の幼子、男の子の誕生、その現れによってそれは引き起こされたのです。この出来事、この記述もまた神のご計画の一つを表した「型」たとえなのです。それはつまりこういうことです。神のひとり子、イエシュアによって、イスラエルの民が神を祝福するようになることと、激しい恐怖に襲われることが同時に起こる、という出来事を指し示しているのです。それはすなわちイエシュアの地上再臨の時に起こるものです。かつてイエシュアを信じず、メシアとして受け入れなかったばかりか、罪人として十字架にかけて殺してしまったユダヤ人たち、イスラエルの民がやがてそのイエシュアに向かって「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言うようになる時（マタイ 23:39、ルカ 13:35）が来ることを指し示しています。それは同時に彼らユダヤ人が、獣と呼ばれる反キリストの大迫害を受けて非常に苦しみに見舞われる時、まさにエーマー「大いなる暗闇の恐怖」のそのどん底を味わう時でもあります。これらのことがやがて終わりの日に起こることがここには表されているのです。こう預言されているとおりです。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

13:1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる…

13:9 …火の中に入れ、銀を錬るように彼らを錬り、金を試すように彼らを試す。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言ひ、彼らは『【主】は私の神』と言う。

やがてイスラエルの都「エルサレム」は、敵対する国々の軍勢に攻め立てられます。その恐怖の中「ダビデの家とエルサレムの住民」すなわちイスラエルの民、ユダヤ人たちに「恵みと嘆願の霊」が注がれ、「自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て」すなわち十字架にかかられたイエシュアこそが神の御子、まことのメシアであることに目が開かれ、激しい後悔の嘆きをもってイエシュアの御「名を呼び」求めるようになる、ということです。そのような事実が、神のご計画がここでのザカリヤとそれを見聞きした人々についての記述には表されているのです。

4. イスラエルの神

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。

1:68 「ほむべきかな、イスラエルの神、主。主はその御民を顧みて、贖いをなし、

1:69 救いの角を私たちのために、しもベダビデの家に立てられた。

1:70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。

1:71 この救いは、私たちの敵からの、私たちを憎むすべての者の手からの救いである。

1:72 主は私たちの父祖たちにあわれみを施し、ご自分の聖なる契約を覚えておられた。

1:73 私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。

1:74 主は私たちを敵の手から救い出し、恐れなく主に仕えるようにしてください。

1:75 私たちのすべての日々において、主の御前で、敬虔に、正しく。

どうぞこのザカリヤの預言を、何度も繰り返して読んでください。日本語でも十分わかるはずです。この預言が、一体誰が誰に対して語られたものであるかを、「イスラエルの神、主」が「その御民」、「ダビデの家」、「父アブラハム」の子孫、すなわちイスラエルの民に向けて語られた、約束されたものです。それは彼らの「父アブラハムに誓われた誓い」、すなわち

創世記【新改訳 2017】

22:15 【主】の使いは再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて誓う——【主】のことば——。

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

イスラエルの神である主はアブラハムの子孫であるイスラエルに対し、必ずやこの誓いを果たされるのです。さらには「すべての日々において」つまり永遠に、「**主の御前で、敬虔に、正しく**」「**恐れなく主に仕えるようにしてくださる**」という約束も付け加えられています。これも旧約の時代から確かに約束されているものです。

出エジプト記【新改訳 2017】

19:6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。

ザカリヤによって語られたこれらの預言は必ずイスラエルの上に、そしてそれにつながる異邦人の上に成就します。それは人の手によってではなく、人の力や知恵によるのではなく、神の御子イエシュアによって成されます。その事実が次に示されています。

5. 幼子よ

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:76 幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、

1:77 罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。

1:78 これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、

1:79 暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。」

1:80 幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。

この「幼子」とは、状況からしてヨハネのことと言えますが、預言者とは本来、みなメシアであるイエシュアを指し示す存在です。ですからこの「幼子」をイエシュアとして解釈してみます。確かにイエシュアは「幼子」としてこの世に来られ、その生涯において「罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与え」られました。つまり「救い」そのものではなく、「救い」とは何か、どのようなものであるかという「知識」情報を与えられたのです。確かにイエシュアは多くの奇蹟を行われましたが、それらはすべて「救い」をたとえたもの「型」であり、宣べ伝えられた数々の御言葉もまた同様で、それそのものが本質、実態というわけではありません。「救い」の本質、その実態とは先ほどから述べているように、イスラエルに対する神の契約、そのご計画が現実となって起こることです。つまり「救い」は、まだ成されてはいません。ではいつそれが果たされるのか、現実としていつ起こるのか、それは「幼子」が「強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日」に起こります。つまり弱い「幼子」として、朽ちる身体をもって来られたイエシュアが、やがて終わりの日には強い御方、完全な朽ちない身体をもって、王の王、主の主として数多の軍勢を率い、強力な武力と権力を持って「いと高き所から私たちに訪れ」る日、すなわちイエシュアの地上再臨の時に「救い」は成し遂げられるのです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない
名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい垂麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方
である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

そしてイエシュアの地上再臨、上記の預言が成就するまで、それまではこの「救い」は、「荒野」の中に
隠されていることが示されています。それが「幼子は…現れる日まで荒野にいた」という記述です。「荒
野」ヘブル語のミドゥバル(מִדְבָּר)は「神の御言葉、ダーヴァール(דָּבָר)」のある場所、これを聞く所
という意味があります。つまり「救い」は今、聖書の御言葉の中に隠されている、秘められている状態に
あるということです。しかし今日、「幼子」としてのイエシュア、すなわちイエシュアの初臨についての
御言葉は、すでに現実となって起こりました。ですから残るは強くなられたイエシュアの、その再臨です。
御言葉に記されたことは必ず目に見える現実となって起こるのです。

6. 来てください

このように、クリスチャンとも呼ばれる私たち教会が信じている主イエス・キリストとは、イスラエル
の神の御子メシアであるイエシュア、イエシュア・ハマシアハであり、アブラハムの子孫であるイスラエ
ルの民と、それにつながる異邦人とを救われ、そしてこの地上における「神の国」において祝福される御
方です。これらの事実は、聖書の原語であるヘブル語によって聖書を解釈することで大いに導き出される
真実です。しかしその聖書は今日、様々が言語に翻訳され、また国々の文化や思想と混ざり、その真実は
変質し、異なるものに置き換えられ、いつしか聖書はぼんやりとして形を成さない、抽象的ではっきりと
しないものとなってしまいました。教会の数だけ、牧師の数だけ聖書（解釈）がある、と言う人もいます。
まさに創世記 1:2 「地は茫漠として何もなく」という御言葉を最も表現、体現しているのが、実は今日の
聖書でありその解釈なのです。「神の霊が…動いて（創世記 1:2）」、イスラエルの民がイエシュアを呼び
求め、すべてを明らかにされる、神の光であるイエシュアが現れるまで、この地上において聖書の真実は
闇の中です。マルチン・ルターは「主の祈り」を指して、その意味が失われ、ただのお題目のようになっ
ている現実を憂いてこれを「殉教者」と表現したそうですが、今や聖書全体がそのような状態、つまり本
来の意味が封殺されてしまっているのです。思えばイエシュアが幼子として来られたイエシュアの初臨も、
口伝律法による人間的な教えによって聖書が大きく歪められていた時代でした。私はそのような聖書の真
実、本来の意味を少しでも探り出し、解き明かし、宣べ伝えたいとも願ってはいますが、やはり何より私
が求めるものは、聖書のより正しい、より詳しい解釈などではなく、イエシュアが来られること、再臨さ
れることです。そしてイエシュアと顔と顔を合わせて直接対話し、その御言葉を直接聞くことです。そこ
に、そこだけに、そこにこそ、すべての答え、正解、真実があると信じるからです。ですから今日もイエ
シュアを求めます。「主イエシュアよ、来てください。（ヨハネの黙示録 22:20）」と祈り求めます。